

輪郭を描くものとしての〈言葉〉

——リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』について——

セリンジャー（朝さろん）

朝さろんの本棚〈55〉：2016年1月14日（木）

テーマ〈日本語が亡びるとき (1)〉

1 世界とは母国語の外のこと

〈故郷を甘美に思うものはまだ嘴の黄色い未熟者である。あらゆる場所を故郷と感じられるものは、すでにかんりの力を蓄えたものである。だが、全世界を異郷と思うものこそ、完璧な人間である〉

——聖ヴィクトルのフーゴー

日本語を綴るのは、日本人のみではない。日本人とは、日本国籍を取得しているものを指すのか。日本に暮らしている人々を指すのか。

日本語を母語とする人間を指すのか。黄色人種で日本人の血を引いている存在だけを指すのか。日本語という言語の自明性に比べると、「日本人」という括りはひどく曖昧で、おぼろげに感じられてくる。この当たり前でシンプルな事実の向こう側で、どんな存在が、どんな思いで、日本語という言葉を刻んでいるのだろう。そしてこの事実が、日本人に、日本語の未来に、どんな影響を齎したのだろうか。なによりわたし達は、そのようなカタチで紡がれた小説を読むことで、いったい何を見聞きすることになるのだろう——。

あらゆる思考の道具になっている言葉という存在。その道具としての言葉が〈日本語〉であるということはどういう意味を持っているのか。あまりにも身近な日本語という母語をめぐって、みなさん

でいっしょに旅してみたいと思う。

世界とは、母国語の外のこと——。この〈世界〉についてのイメージを捉えなおし、柔軟な思考でいまを見つめることこそ、「グローバル」や「インターナショナル」というコピーが飛び交う時勢のなかで、私たちが本当に必要としていることなのではないかと、そう考えるのだ。

本書『星条旗の聞こえない部屋』に則して見てみよう。

表題作が発表された一九八七年という時代にあつては、日本人の血を一滴も持たないぼくが、なぜ日本語で小説を書くのか、という質問をよく受ける。と著者自身が述懐するように、在日朝鮮人やアイヌ、琉球人といった日本国内に居住している存在以外の、日本語を母語としない人間が日本語で創作活動を行うことへの新奇さが際立っていた。そこから三十年近い時間が流れた現在でこそ、デヴィット・ゾペティやアース・ビナード、シリン・ネザファイや芥川賞受賞者でもある楊逸などの後進作家も大勢登場している。また日本人作家が海外に居住し、現地の言葉で創作活動を行っている例も多数見受けられるようになっていく。

こうした〈越境〉系の作家たちはいまや、デヴィッド・ダムロッシュが〈世界文学〉(What is World Literature?; David Damrosch, 2003/邦訳:国書刊行会, 2011)と指摘する大きな潮流に連なる運動体の一部を形勢している。その意味でリービ英雄の存在はまさしくこうした運動の嚆矢といえる。しかし、リービ英雄や本書の真価が充分に理解され尽くしているとは言い難い。本書の再読を通じて、

いまもう一度、本書が切り開いた言葉の世界を問い直してみたい。

富岡幸一郎氏は本書解説の中でその意義を「たんに外国人が日本語で小説を書いたということよりも、明治の近代化における言文一致運動以来の日本語というものの可能性が、改めて今一度、根本的に問い直されたといってもいい」と指摘する。西洋圏の作家が日本語で創作するという事態は、日本語が日本人あるいは日本というナショナル・アイデンティティをつくり出す装置となったのであり、言語||人種||文化||国籍という単一性のイデオロギーを生み出すことになった(本書解説)という近代日本語の構造そのものに揺さぶりをかけた、ということの意味する。

では本作の登場で最も問題とされたことは何か。作家はそれをヘクトバの「所有権」だという。(日本人として生まれた人たちといくら体験や感性を共有しても、人種を共有しない者にとつて、日本語にはあくまでも「借地権」という条件が付いていたのである)(日本語の『所有権』をめぐる『日本語を書く部屋』二〇〇一年所収)と作家は語る。私たち読者はこのことを、作品を読むことで「当事者」として追体験することになるのだ。

追体験が可能になっているのは、日本人だけが「借り物」と思っていた彼の日本語が、本物||つまり作家の所有物になっているからだ。困難の果てに獲得された作家の日本語が、日本人だけが所有していると思っていた日本語と同一の機能を発揮しているからに他ならない。まさしくダムロッシュがいう(二つの読みのモード、すなわち、自分がいまいる場所と時間を越えた世界に、一定の距離をとりつつ

対峙するという方法〉が達成されているのを目の当たりにすることになる。

2 「お前はやつらのひとりにはなれない」

ベン・アイザックを主人公とする連作の第一編「星条旗の聞こえない部屋」の中で、ベンが父親から〈お前はやつらのひとりにはなれない〉と言いつてられる。

ベンが領事館（＝英語が母語される空間）との自室で、夫婦の話す上海語とも異なる日本語で、漱石の『こころ』や三島の『金閣寺』の翻訳をたどどしくノートに刻んでいるのを見かねた父から〈まだ日本の常識が分っていない〉と苛立ちをぶつけられる。それは〈お前がやつらのことばをいくら喋られるようになったとしても、結局やつらの目には、ろくに喋れないし、喋べろうと思つたこともない私とまったく同じだ。(略) お前はやつらのひとりにはなれない〉という父の諦念とも怒りともつかないものだった。

ではベンがわかつていない「日本の常識」とはなんなのか。なぜベンは日本人のひとりになれないのか。

日本人は日本人以外が日本語を話すことには慣れることはない。常にそのことに警戒し続けているからだ、そう解釈することもできらるだろう。前節で確認した解説者の指摘を引くなら〈言語Ⅱ人種Ⅱ

文化Ⅱ国籍という単一性のイデオロギー〉が全て揃っていないければ、決して正當な日本人ではないのだという理解が父には、いやベンの中にもあつたのかもしれない。

作中年代である一九六七年当時、そのような意識が大勢の日本人にはあつたように描かれる。いや、二〇一六年の現代にあつてなお、そのような意識・無意識が多数の日本人にあることは明らかだろう。この根深さを読者は、同時代の問題としても痛感することになる。

しかし、重要なのは、ベンが〈やつらのひとりになろうとしていなかどうか、である。言い換えれば、父から〈まだ日本の常識が分っていない〉と叱責されてもおおベンが日本語の吸収に心血を注いだのはなぜなのか、という問いだ。

このことはベンの出自と無関係ではない。ベンはアメリカ領事館に住まう存在でありながら典型的な白人エリート層(WASP)ではない(半分ポーランド系で、半分ユダヤ系)である。両親は離婚してカトリック系の母の元で少年期を過ごし、その後年若い上海人の妻を娶つた父の勤める日本へとやってきた。信教は儒教だというようなユダヤ人の父の元へと。家庭では英語と上海語が飛び交っている。

この何重にも境界線が侵犯されている複雑な立ち位置こそが、ベンが立っている場所なのだ。それは自分自身でも自分のことを腑に落ちるように説明できない、というもどかしさにもつながっている。「日本人に認められるか否か」という問題と、「自分は何者なのか」という問題の二つが、十七歳のベンの心を塞いでいるのだ。このことはベンが自身をヘレン・ケラーに重ね合わせている、〈物も見えない

い、音も聞こえない、何も知らない、何も知ることはできない、暗闇の中に生きていた聾啞の少女は、周りの人間にとって、自分の家族にとつてすら、「外人」だったのだ」と述懐しているシーンからも窺い知ることができる。

星条旗たなびく領事館という警備の厳重な、治外法権の認められた独立した空間に暮らしながらも、その実、そこに生活しているベン自身の意識下ではなんの輪郭線もなかったのだと言える。ベンが日本語を習得しようとしたのは、自らの言葉で、自らの手で、自分のアイデンティティを記述しようとしたからではなかったか――。

3 安藤はなぜベンに関わるのか

ベンはW大学の国際研究所に通って日本語を習おうとする。その留学生控室で、ベンは十九歳の安藤義晴と友人になる。この安藤は自らベンに関わろうとする。

では安藤はどうして留学生控え室でベンに〈日本に来て、どうして英語で喋っておるんですか〉と日本語で話しかけたのか。

また〈あなたはかざりものにすぎない〉などの失礼な発言をわざわざベンに向かって言ったのか。

そして最も大きい疑問は、ベンに〈おら教えてやるよ〉と積極的に日本語を教える役割を買って出たのか、という点である。これらは

すべて、安藤がベンに意図的に関わろうとしている様子として理解することができるだろう。

これらの問いに答えるためには、何について考えてみるべきだろうか。仮に二つの観点を想定してみたい。一つは安藤という人間の出自や性格、そしてベンとの共通性について。もう一点は、安藤が実際にベンに日本語を教えるその様子である。

安藤はその外見からして一般の学生と違う様子が描かれる。多数の学生が長髪でシャツを着てラップズボンを穿き、ベトナム戦争について議論したり、フォークを口ずさむ中、安藤は角刈りに黒い学生服をまとい、学帽も携えていた。流暢な英語を使う英会話クラブのメンバーを余所に、愛知県から上京してきた安藤は〈田舎くさい〉存在で、訛りの残る方言(おら)日本語でベンに話しかけている。留学生教室の中にいる人間たちのなかで、ベンと安藤の異質性だけが際立って描写されている。安藤の〈あなたは、かれらにとって、舶来のリングとか、ペンダント、にすぎない〉という発言は、英会話クラブの学生たちへの明快な否定である。安藤自身も、ベンと同じように、この学生たちに馴染めずにいたことが読者には予想される。

それだけでなく、安藤は英会話クラブの学生たちの欺瞞をも暴き立てる。それも日本語で。英会話クラブの学生が日本語を使い始めた途端、〈おたくはこの外人とは関係がないじゃないですか〉という発言をし出し、その内心には〈学生服の学生とベンに対する侮辱が唾液のように溜まっていた〉ことが明らかになる。このことからわかるのは、安藤とベンは共に疎外された存在という共通項がある

のだ。その共通項は、安藤の〈日本に来て、どうして英語で喋っておるんですか〉に対する〈じゃ、私と日本語で話してください〉というベンの回答を引き出した。こうして二人の間に親和性が生まれしていく。

もう一つの、安藤が実際にベンに日本語を教える様子についても見てみよう。安藤はそもそも〈とにかく英語が苦手〉で、〈英語を習うこと自体に興味があった〉。彼には〈英語はあくまでも入学試験の一科目に過ぎなかった〉し、現に〈日本人である俺が、何で英語で喋らなきゃいけないのか〉と言って憚らないほどである。外国語習得についてこのような見解を持っており、英会話クラブの学生たちの外国語学使用の様子を〈かざりものにすぎない〉と切つて捨てた安藤にとっての外国語習得方法とは、一体いかなる形でなされるべきであったと考えられるだろうか——、という問いを立ててみたい。

安藤がベンに教えた日本語は〈私が、あなたに、教えます〉という一般化・抽象化された教科書流の〈私〉というアプローチではなかった。〈おら教えてやるよ〉或いは〈おれが教えてやる〉という〈おれ〉独自のアプローチだった。言い換えるなら、〈ワタクシハベイコクジンデゴザイマス〉という仕方ではなく、〈案内はすべて日本語〉で、〈聾の弟を連れて出歩いている兄のように、なるべく「障害」を無視しようとして、ごく普通に喋りながら、一歩後に従えて歩く〉という仕方だった。それは日本人の友人のひとりとして、教えるのではなく体験させるというやり方である。

安藤にここまでのことをさせたのは、やはりベンの抱える孤独を安藤が敏感に感じ取り、共感を寄せていたからではないだろうか。そして安藤自身も似たような孤独を抱えていたのであると想像できる。政治運動の季節の中、学生運動に対して〈俺は関係ない〉と呟いた安藤。英会話クラブの欺瞞に耐えられなかった安藤。彼が関係したものは、ベンが持て余してしまっていたような、うまく馴染めるものがないという孤独だった。だからこそ安藤にはベンという存在が必要だったのでないか。

4 「この部屋の中のすべてが分った」とは何か

ベンが安藤と出会った留学生控室。ここでベンは〈うんざりするほど、この部屋の中のすべてが分った〉述懐し、この部屋を後にして二度と戻ることはなかった。

日本(人)の暗喩ともいえるようなこの部屋の中で、ベンが「分った」こととはなんだったか——。

この部屋の中には留学生たちと、彼らと英会話を交わすチャンスを持つ日本人の学生たちがいる。学生や大学院生が入り混じるこの部屋にあつては、留学生たちは〈悪口雑言〉を口にし、日本人を〈未熟未熟〉と軽蔑している。その軽蔑されている日本人学生たちでさえ、ベン

を（臆病な狩人が獲物を見つけたような、しかし何となく友好的な目つきで）狙っているのだ。日本の大学の一角でありながら日本人学生よりも留学生が支配的な様子で描かれるこの場面は、作中で度々描かれる領事館から眺める山下公園の様子と自然と重なる。決して平等ではない優劣の意識、パワーバランスと排他性、安藤が暴き立てたような日本人学生が隠し持っている外国人への攻撃性。そして日本人学生と留学生が共に抱えている根源的な無関心。

ベンは、自ら望み日本語の習得のために通っていた大学でも、自宅である領事館と同じような世界の縮図を感じ取るようになってしまった。だからこそベンはこの部屋の中のすべてが分つた」と呟き、心底うんざりしたのではないだろうか。同時にベンには、自分が本当に必要としているような日本語、自身のアイデンティティを記述する為の日本語がここにはないこともまた、痛感したのではないか。ベンが安藤の助けを借りて、彼自身の日本語を、生きた日本語を学びに出かける。その場所こそが（しんじゆく）である。

5 「しんじゆく」——世界の中にと感じられる場所

ベンが安藤と行動するようになって新しい感慨を得るようになる。それは（日本語の中で充実して生きている安藤のことだが、日本語の音としてしか伝わって来ないとき、ベンが川のほとりを走ってそ

の流れる水を空しく追いかけている気がした。ベンはことばという水を汲めない聾啞の子供だった」というものだ。しかし見誤ってはいけない。安藤の日本語を聞いて（流れる水を空しく追いかけている気がした）という感想は、これぞとベンが実感を持って思えるような日本語をすぐ身近に感じられていることの証左でもある。

そんな二人にとって（しんじゆく）こそが、約束された場所のように浮かび上がってくる。ベンが（俺も、しんじゆくを知っている」と言ったあの（しんじゆく）。安藤が（そりゃ知っているだろう）」と答えた（しんじゆく）。そして（今度は新宿へ連れて行ってやるよ」と、知るのではなく、実際に体験することを約束した場所。

（しんじゆく）はベンに、（何も知らない、何も知ることはできない、という絶対的な確信の上でよそ者を迎える日本の都会。その中に迷いこんで、今はじめて、紛れもなく、ベンは一つを知ったのだ」という啓示を与えた。

この啓示は（聾啞の少女がその手のひらに、寛大で天才的な先生から「WATER」の文字を描かれて、とつぜん、それが自分の肌を流れている冷たい水だと悟った。その瞬間、ヘレンは水を知っていることよって、はじめて自分が世界の中にいる、実際にいる、という衝撃を与えられたに違いない」とベンに今まで感じたことのない認識をもたらした。そして遂には（この都会に、自分もいつかは参加することが許されるだろう」という予感をも与えることになったのだ。もちろんこの予感が簡単に達成されるものでないことを読者は先刻承知している。しかし、ベンのような異邦人がその境界をまたぎ、

日本語を獲得していく過程でなにを大事にしていたか、どんな体験をしたのかということこそが、より重要である。自分がいま存在している場所と時間を越えたベンの世界に、一定の距離をとりつつ対峙することで私たちの中に芽生えた「問い」を、じっくりと育んでいきたい。物語に寄り添うことの醍醐味は、ここにある。



【あらすじ】

横浜の領事館で暮らす十七歳のベン・アイザック。父を捨て、アメリカを捨て、新宿に向かう。一九六〇年代末の街の喧騒を背景に、言葉、文化、制度の差を超え、人間が直接向き合える場所を求めてさすらう柔らかな精神を描く野間文芸新人賞受賞の連作三篇。

「日本人の血を一滴も持たない」アメリカ生まれの著者が、母語を離れ、日本語で書いた鮮烈なデビュー作。

※初出※ 「群像」一九八七年三月号

単行本『星条旗の聞こえない部屋』（一九九二年）講談社

【著者プロフィール】

リービ英雄（リービ ひでお、Ian Hideo Levy）1950年11月29日・）は、アメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー生まれの小説家・日本文学者。本名、リービ・ヒデオ・イアン。日本語を母語とせずに日本語で創作を続けている作家の一人。現在、法政大学国際文化学部教授。ユダヤ系アメリカ人。

東欧系ユダヤ人の父と、ポーランド人移民の母親をもつ。父親は外交官で、英雄は少年時代から台湾、香港、アメリカ、日本と移住を繰り返す。“ヒデオ”は父の友人に因んで付けられたもので、幼少時からの本名である。

プリンストン大学東洋学専攻卒業、同大学院に学び、1978年、柿本人麻呂論で文学博士。同大学で、中西進に『万葉集』を学んでいる。プリンストン大学助教授ののち、スタンフォード大学准教授（テニウア付）を辞して、日本に渡る。小説を書き始めたのは、中上健次の示唆がきっかけだった。

参加者…8名

進行…芹澤

【会の記録】

感想や意見

- ・引き込まれた。表現方法や、未明の光の感じに癒された。平仮名の使い方の独特さや「の」の字についての考察など、文字について語りながらも官能を感じさせる箇所があつて印象に残った。
- ・日本語の母語使用者が書いたかのような、大きな違和感のなさが逆に新鮮だった。この作品の成り立ちを考えたときに、「違和感なく読める」というのはどうなのだろうか。なにを意味するのか、興味を覚えた。
- ・翻訳くささを感じなかった「日本語ネイティブです」と言われたら信じてしまいそう。
- ・吃音の問題、言葉がうまく出てこない、不能者の感覚、そういった思うようにならない身体性とそれに引きずられる意識の存在を、読んでいる間ずっと覚えていた。
- ・作中で描かれる昔の新宿像が非常に懐かしかった。この作品の裏テーマは「青春」だろう。だからこそ本作は青春文学としての側面もある。清々しい。マージナル・マンが描いた異郷での青春。
- ・興味を持ってない作品だった。作品が内包するテーマやモチーフが、じぶんには程遠いものだったのだろうか。でも一方で、なにか心に残るものがある。読んでいった本(三島の「金閣寺」など)が、主人公ベンの血肉になり、格闘しながら言葉を獲得していく様子が胸に残った。
- ・ベンは日本人になりたかったのか。日本語だけ学べればよかったのか。あるいは、それとも違う、ほかの何かだったのか。
- ・安藤がベンに関わるのは、じぶんとベンに似たものを感じたからだろう。例えば English の支配的な様子への反感とか。
- ・西洋世界を勝手に代表させ、なにかを代弁させるような本当は真つ当じゃないやり方に、はっきりと否を突きつけたのが安藤とベンだったのでは。
- ・日本人集団の中で馴染めない安藤と、外国人集団の中で居場所のないベンは、共につまはじきもの。内(日本人)からも外(外国人)からも等しく疎外されている二人にだけ通じる心境があつた。
- ・大学の英語学習という比喩的な空間のなかで、けれど言語学習を本当に必要としている人はいなかった。ベンが求めたのは自分を語ることを可能にする「生きた日本語」で、それはこの教室の中にはそもそも存在しないものだった。
- ・その意味では、誰もが落ち着き場所がなく、漂う存在ばかりだったともいえる。背景に描かれている世相の移り変わりのように、熱量は感じさせるが一方で空虚な、ふわふわした雰囲気を感じた。